

定時帰宅を咎めると、当然ながら自分が定時帰宅しようとした時にも同じように咎められてしまいます。「お前だけズルい」という態度を外に出すと、一時的にスッキリするかもしれませんが、長期的には損をしてしまうことのほうが多いのです。他人に非寛容で、価値観の押し付けをすることは足の引っ張り合い以外の何ものでもありません。

社畜は6つの仕事観に支えられている

前節では社畜を5つのタイプに分類してみましたが、ここからは、**社畜を支える仕事観**について考えていきます。

ここで挙げる仕事観の中には、日本の教育現場やメディアなどが積極的に後押ししているようなものもあります。もしかしたら、ここで紹介する仕事観について「当然そうあるべきものだ」と思っていた」という人もいるかもしれません。

どんな仕事観を抱くのも個人の自由ですが、よく考えてみるとそれは会社にとって都合がよいだけの考え方だったりもします。また、前述のゾンビ型社畜のように、自分の仕事

観を絶対的に正しいと思い込んで、他人に押し付けようとする人たちもいます。

特定の価値観に強く入れ込んでしまつて、物事を客観的に見るができなくなるということはよくあることです。ここで一度、世にはびこっている6つの社畜的な仕事観について、冷静に考えなおしてみる必要があります。

①「やりがいのある仕事につけたら、それで幸せ！」

日本では、仕事の話になると必ずと言っていいほど「やりがい」という言葉が出てきます。

就職活動で会社説明会に行けば、「仕事のやりがいは何ですか」と質問をする学生をよく見かけます。会社の採用ホームページでも、現役社員が仕事のやりがいについて語るコンテンツは定番中の定番です。

このように、仕事の「やりがい」がいたるところで強調されまくっていると、仕事でいちばん大切なものは、給料でも労働時間でもなく、「やりがい」であるかのように思えてきます。

「お給料はそんなに高くないし、休みもほとんどなくて毎日忙しい。だけど、この仕事自体はものすごくやりがいがあるので、満足している」
 そう言って、目を輝かせて働いている人を見たことはないでしょうか。
 こういう姿勢で働く人を、「立派だ」と思う人が日本には多いようですが、実際にはもつと冷静になって考えなければなりません。

立場を変えて考えてみましょう。

会社員のように雇われる側ではなく、彼らを雇う側、つまり経営者にとって、このように「給料よりもやりがい」を重視する人たちはとても都合がいい存在です。

普通、仕事の額に見合わないぐらい給料の額を低くすると、労働者からは当然不満が出ます。一方で、このように「やりがい」で働こうとする人たちは、たとえ給料の額と仕事の内容が見合っていないなくても、仕事の中に「やりがい」さえ見つけられれば、不満は言いません。不満を言わないどころか、「やりがい」のある仕事を与えてくれる会社という存在に感謝しながら、一生懸命働くという人も少なくないでしょう。

「会社で『飲みニケーション』を支援するために飲み会に補助金が出ることになったが、そんなことよりも給料を上げてほしい」(27歳、事務職)



ダメ男と別れられない女の気持ちに
 ちょっと似ている

一言で言えば、こういう働き方をする人たちは、**経営者にとってはとても「おいしい」存在だ**、ということになります。

こんなおいしい仕組みを、利用しない手はありません。労働条件の悪いブラックな会社ほど、仕事の中にある「やりがい」の価値を前面に押し出そうとします。

「やりがい」という言葉が無条件ですばらしいものだと思いついてしまつと、こういった「**やりがいの搾取**」に引つかかる危険性があります。

別に、「やりがい」を持って働くことが絶対にいけないというわけではありません。

ただ、「やりがい」が仕事の中でいちばん大切なことで、これが手に入るのであればどんなに給料は安くてもいいとか、どんなに残業させられても構わない、と考えてしまうのはいかにも「**社畜的**」な発想です。これでは簡単に、奴隷型社畜やハチ公型社畜にされてしまいます。

②「**つらくてもいいから、成長したい!**」